

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu
蒼穹

2014.12 Vol.117



校舎屋上にソーラーパネル設置(詳しくは裏表紙をご覧ください)

特集 安心・安全なまちづくり 防災・災害対策支援の取り組み

- [大学COC事業]による最近の取り組み
地域とともに学び考える～公開講座を開講～ P.02
- 第5回「松本大学地域貢献大賞」が決定 P.04
- 平成26年度文科省「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」
松本大学と松商短期大学部 今年度も2部門で選定 P.06
- 好調な就職内定状況～2014年度卒業予定者～ P.08
- 長野県の観光業活性化をめざして
「新そばと食の感謝祭日帰りバスツアー」実施 P.09
- P.11 ほか

防災・災害対策支援の取り組み

本学では、災害・防災問題を“地域づくり”の大きなテーマとしてとらえ、地域の中で大学の役割をどのように果たすべきか積極的に考えています。今年度は本学を会場に松本市総合防災訓練や防災士養成講座を開催し、学生と住民がともに学ぶ機会を提供しました。

また、被災地での支援活動や、学内に独自の防災組織を計画するなどの具体的な取り組みを進めています。

(防災対策委員長・総合経営学科長 准教授 矢崎 久)



写真 / 松本市総合防災訓練

「災害・防災対策」でイメージしやすく

“地域づくり”は、今や全国どの自治体でも施策の重要な柱に位置づけられ、地域振興や地域再生の大前提となったかのように、日本社会に浸透しています。しかし、“地域づくり”という言葉聞いて具体的に何を思い浮かべるかは、まさしく千差万別、十人十色、という現状です。課題が山積する地域社会、そして消滅するかもしれないその将来、こうした重苦しい状況に置かれた社会がどの方向へ向かえばいいのか、どのような

“地域づくり”を目指すのか、人によって考え方が異なります。

ところがこのような曖昧さを持つ“地域づくり”であっても、災害・防災対策を軸に考えると、議論は極めて効率よくかつ具体的になり、イメージしやすくなります。災害・防災対策を核とした“地域づくり”には、そのような特徴があります。



被災地での支援活動を活かす

地質学、気象学などの災害に直接関わる学部学科を持たない本学が、災害・防災対策に積極的に関わる理由は、“地域づくり”の一点にあります。どうすれば充実した、活力のある地域が形成されるのかを教育・研究の柱に据えて常に地域社会に目を向けるなかで、災害・防災問題は本学の地域連携活動の軸に位置づけられる

ようになりました。今や災害・防災問題は、“地域づくり”を構想する際の重要かつ不可欠の要素なのです。

本学が災害・防災問題を“地域づくり”の大きなテーマとするきっかけになったのは、やはり2011年3月の東日本大震災です。東北から関東にかけての太平洋岸の惨状を目の当たりにし、何か行動を起こすべきではないかと皆が感じました。大学として、どのような発想でどのように行動するかを考え、「被災地の教育機関を丸ごと支援する」という結論に至りました。それ以来今日まで、学習支援やその他の教育活動で宮城県石巻市の大街道小学校をサポートする活動を続けています。

災害・防災を念頭に置いた“地

域づくり”について定型がない中で、学生の被災地での活動はかけがえのない、そして知見を蓄積する貴重な機会となっています。

こうした活動をもとに本学は、教育・研究・地域貢献の全分野に災害・防災問題を組み込み、解決すべき重要な地域課題として扱う体制を整えつつあります。災害を意識した“地域づくり”、災害に対処できる“ひとづくり”、被災を想定した“健康づくり”は今や、強い地域志向を持つ本学の責務でもあると考えています。



松本大学東日本大震災災害支援プロジェクトの活動



大街道小学校での学習支援活動

大学内に消防組織を計画

今年度は、本学を会場として自治体・防災関係者、地域住民、そして多くの学生が参加し、松本市総合防災訓練と防災士養成研修講座が開催され、災害・防災の“地域づくり”“ひとづくり”“健康づくり”への具体的な一歩を踏み出すことができました。



さらにより具体的な防災関連活動として、来年度には、大学内に自前の消防（防災）組織を立ち上げようとしています。大学独自の組織とはいえ、近隣の消防団等と連携し、先行している団体と十分に相談しながら機動的な“松本大学災害対策チーム”（仮称）の発足を目指すものです。

「初期行動の重要性」、「被災・避難生活は予想以上に長引く」、この2つは、小規模な火災から激甚災害に至るまで、過去幾多の事例が明確に物語っています。地域が（この場合の地域とは、ほぼ町会

程度の範囲を想定）災害発生に際し初期対応をとる場合、他地域からの支援はもとより、消防署等の専門集団の出勤すら期待できないと考えるべきで、あくまでも地域住民が主体にならざるを得ません。初期対応に関する限り、“自分たちの生活と命は自分たちで守る”しかないのです。とすれば、多くの若者が集結している大学ができることは少なくないし、そのような大学が果たす役割は計り知れないでしょう。ましてや、健康・福祉・地域運営に関する学部・学科を持つ本学が手をこまねくこ

となどあつてはなりません。独自の消防組織は、現場を重視する本学の可能性を、防災・災害対策のフィールドでさらに広げる重要な活動になるはずで

さて、本学では平成28年度以降に、防災・災害対策に関するPBL型授業（“PBL”は、Problem-Based Learning あるいはProject-Based learning の略で、具体的な個別課題に焦点を当て座学・実地体験・演習のすべてを含んだ学びや授業を意味します）を予定しています。全国のさきがけとなる試みであると同時に、本学の教育機能のウィングをさらに広げるという意味を合わせ持っています。PBL 型授業は学生を対象とした教育活動とはいえ、地域住民の参加も可能であり、本学が広く地域に開かれた大学であることを示す事例となることでしょう。



松本大学生45名が防災士に認定 —「防災士養成研修講座」開講—

11月15日、16日、日本防災士機構認定の防災士養成研修講座を開催しました。学生46名（本学45名、他大学生1名）、社会人59名の計105名が受講し、災害時の対応について学びました。

開講式では住吉廣行学長が「防災士講座は文部科学省の『地(知)の拠点整備事業』に採択された事業計画の具体化であり、学生には防災士認定後に地域防災の取り組みに参加し、社会人の方には職場や地域で防災士として活躍していただきたい」と挨拶し、受講生を激励しました。

14時間のカリキュラム(右記)を全員が受講し、のべ4時間のグループワークでは「ハザードマップづくり」を通して地域コミュニティの連携を深める演習(DIG)と、避難所運営スタッフとしての気配りや相手の立場に立った決断をするケーススタディを行いました。講座終了後の防災士機構から派遣された試験官による検定試験で

管理課長 臼井 健司

104名(本学学生は全員)が合格しました。

県内外の行政、学校、郵便局、建築、出版、病院など幅広い業種の社会人受講生とともに学んだ学生たち。「2日間で12単元の講義はきつかった」と述べるとともに「グループワークは社会人の方の経験や考えを聞く機会とな



り勉強になった」とその多くが手応えを感じたようです。

来年は9月頃の開講を予定しています。

■講師一覧 表記は講座名・講師名・()内が所属

災害とボランティア	尻無浜 博幸(松本大学総合経営学部教授)
災害と報道	渡辺 秀樹(信濃毎日新聞論説副主幹)
土砂災害と対策・地震の仕組みと被害	小坂 共栄(信州大学山岳科学特任教授)
防災士の役割・災害と危機管理	東尾 正(株)日本経済研究所理事、元消防庁次長)
災害想定とハザードマップ	黒田 洋司(消防科学総合センター研究開発部長)
行政の災害対応	板倉 章(松本市危機管理部危機管理課長)
耐震診断と補強	新井 典夫(南A&A構造研究所代表取締役)
被災者支援・避難所運営 講義とワーク	天野 和彦(福島大学つくしまふくしま支援未来センター特任准教授)
身近でできる防災対策・都市防災	廣井 悠(名古屋大学減災連携研究センター准教授)



文部科学省

地(知)の拠点

大学COC事業

地域とともに学び考える ～2014年度公開講座を終えて～

COC戦略会議 議長・総合経営学科 教授 木村 晴壽

本学は文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」(COC)の採択を受け、「ひとづくり」「まちづくり」「健康づくり」の3つのテーマを掲げて活動しています。

9月～12月上旬に一般市民の方を対象に開講した公開講座の様子を紹介します。

今年度の公開講座では、松本市が打ち出している「三がく(学・業・岳)都」を縦軸に、本学のバックボーンである“地域づくり”“健康づくり”“ひとづくり”を横軸として組み合わせたテーマを掲げました。

第1タームは【防災の“まちづくり”】、第2タームは【スポーツを通じたこどもの“からだ・こころそだて”】、第3タームは【地域の歴史と“ひとづくり”“まちづくり”】、第4タームは【地域のビジネスと“ひと”“まち”“づく

り”】とし、いずれも地域にとって欠かすことのできないテーマを取り上げました。

全国的に強い関心事となっている防災問題を第1タームとしたのは、防災を念頭に置いた“まちづくり”が本学COC事業の目玉となっているからに他なりません。しかし、火災対策の第一人者である関澤愛氏(東京理科大学大学院教授)を講師に迎えて第1講を開いていたまさにその時刻に、御嶽山噴火という大災害が発生したのです。私たち



が噴火のニュースに接したのは講座終了直後でしたが、今更ながら災害・防災対策の遅れを痛感する、因縁の出来事となりました。

第2タームで焦点を当てた、子どもの“健康づくり”では、教師、保健士など実際に子どもたちと接する方々がいかにか腐心して活動しているかを知ることができました。また地域の歴史遺産に目を向けた第3タームでは、難しいテーマにもかかわらず“まちづくり”“ひとづくり”をじっくり考える機会となりました。

さらに地域社会にとっての最重要課題である、地域の経済基盤をどのように確保するかの問題を正面からとらえた第4タームには、実際にコミュニティビジネスを実践している方々が多数参加されました。今や、地域社会が総力をあげて、課題解決のためのビジネスを生み育てなければならない時期に来ていると実感しました。

■第1ターム 防災の“まちづくり”

	講師	テーマ
第1講	関澤 愛氏 (東京理科大学大学院教授)	そのとき地域にいる誰もが参加する防災のまち
第2講	尻無浜 博幸 (松本大学教員、松本大学東日本大震災災害支援プロジェクト代表)	災害とボランティア活動 —東日本大震災被災地を手がかりに—

■第2ターム スポーツを通じたこどもの“からだ・こころそだて”

	講師	テーマ
第1講	中島 節子 (松本大学専任講師)	こどもの健康
第2講	矢崎 久(松本大学准教授) 齊藤 茂(松本大学専任講師)	こどもの“こころそだて”
第3講	岩間 英明 (松本大学准教授)	こどもの体力低下、何が問題か?

■第3ターム 地域の歴史と“ひとづくり”“まちづくり”

	講師	テーマ
第1講	窪田 雅之氏 (松本市立博物館館長)	松本まるごと博物館の“まちづくり”
第2講	木村 晴壽 (松本大学教授)	地域の歴史と“ひとづくり”

■第4ターム 地域のビジネスと“ひと”“まち”“づくり”

	講師	テーマ
第1講	牧野 光朗氏 (飯田市長)	地域の存続と地域経済
第2講	白戸 洋 (松本大学教授)	商店街の“まちづくり”と“ひとづくり”

心に残る公開特別講演会

健康栄養学科 学科長・教授 廣田 直子

秋から初冬にかけて異なった目的をもって実施した特別講演会の概要を紹介します。

生ゴミから考える地域づくり

10月25日に、松本大学地域志向教育研究費による特別講演会「土はいのちのみなもと」の地域づくりを開催しました。講師は山形県長井市のNPO法人レインボープラン市民市場「虹の駅」理事長の菅野芳秀氏でした。本学健康栄養学科と菅野氏との交流は深く、それが本学でのささやかな生ゴミ循環システムへとつながっています。今回も長井市の生ゴミ循環システムであるレインボープランの現状を題材としてお話いただきました。生ゴミを考えることは私たちの暮らしを考えること、地域やコミュニティづくりに不可欠なのは「熱意」である

ことなどを力強く語ってくださいました。

「栄養士の使命」と「ペップトーク」を学ぶ

12月6日は健康栄養学科公開特別講演会と、地域健康支援ステーションのフォローアップ研修会としての特別講演会の2本立てでした。午前中は(公社)日本栄養士会監事と弁護士の前野貴文氏を講師に迎え、「管理栄養士・栄養士の使命と魅力を考える」というテーマで講演していただきました。栄養



士という資格がどのような理念のもとに誕生したのか、現代社会における管理栄養士・栄養士の使命とは何か、プロフェッショナルとしての姿はどうあるべきかを、国民目線で丁寧に説明していただきました。学生たちには今後の学習に活かしてほしいと思います。

午後は、(一社)

日本ペップトーク

普及協会認定講師の堀内裕一朗



氏が「ペップトークで人生が変わる」というテーマで話されました。ペップトークは「短い激励のメッセージ・前向きな背中を一押しする言葉だけ」だそうです。それを使って人々の夢を支援するドリームサポーターになるための方法について、また自分のやる気を引き出すためのセルフペップトークについて楽しく感動的にお話くださり、笑顔と感動の涙があふれる講演会となりました。

楽しく学べる「みんなのカレッジ」

管理課長 白井 健司

11月15日、16日に本学を会場に「みんなのカレッジ」(市民タイムス、ABN、松本大学共催)を開講しました。このカレッジの特徴は各分野の専門家が講師として集まるブティックのようなスタイルにあります。今年は本学教員の専門分野である食事や運動、健康づくり、色の楽しみ方や旅のアドバイスなどの講座のほか、病院職員、税理士、音楽講師など地域で活躍する方たちによる、健康、音楽、水墨画など楽しく学べる計18講座が用意されました。幅広い年代の方、約350名が受講し、受講者は熱心に聞き入りました。



アンケートによると今回参加した方々の男女比は3:7で、平均年齢は59.5歳(前年66.5歳)でした。夏の「ものづくりフェア」に続き、秋の「みんなのカレッジ」も、子どもからシニア世代まで一緒に学べる“交流の場”として回を重ねることで定着させていきたいと思っています。

全国レクリエーション大会で取り組み発表

地域健康支援ステーション
健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

9月19～21日に福島県で開催された第68回全国レクリエーション大会の研究フォーラム「ユニバーサルデザイン支援法を仕事から学ぶ～健康寿命を高める7人の仕事人～」で、当ステーションの取り組みを発表しました。

ステーションの運動実践指導では、日ごろから運動を楽しく継続するためにレクを取り入れています。学生9人と犬飼己紀子教授及び一般の方々60人が参加実演し、大変楽しく運動できたと好評を頂きました。

学生は、実際にレクの運営などを学び、とても有意義だったと述べています。来年は長野県で大会が開催されます。学生にとって生きた学びの機会になると期待しています。



「一日限りのレストラン」で学生も大きく成長

健康栄養学科 専任講師 成瀬 祐子

今回で8回目となる「一日限りのレストラン」を、大学祭「梓乃森祭」にあわせて開催しました。今年は健康栄養学科の2～4年生37名が参加し、5月から活動を開始しました。今年のテーマを『松大生が贈る 信州・いのちの恵み』と決め、鹿肉の赤ワイン煮込みや信州サーモンのハーブムニエル、白キノコのポタージュスープなど、工夫を凝らしたメニューを提供することができました。そして、お客様として来てくださった地域の方々に料理、接客ともにご満足いただけたこと、信州に住んでいても食べる機会の少ない鹿肉や信州サーモンの美味しさをお伝えできたことに学生たちはとても喜びを感じていました。

本取り組みはすべてを学生主体で

進めています。参加したほとんどの学生がこの活動を通して実践力や協調性、コミュニケーション力、さらには課題発見力や問題解決力も以前よりついたと感じていました。これもひとえにレストランを応援して下さる地域の方々の支えがあってこそと感謝するとともに、学生たちがこの経験をさらなる成長の糧としてくれることを期待しています。



「健康日本21推進大会」に学生達が参加協力

スポーツ健康学科 専任講師 中島 節子

「健康日本21推進松本大会」が松本市音楽文化ホールで開催されました。講演会と展示体験ブースで構成され、ゼミ生と松本大学のブースで身体組成、骨密度、握力測定を行いました。学生達は、結果を説明し、余裕が出てくると日常生活の様子を聞きながら骨密度を保つための工夫などを話していました。体験された方々からも好評でした。参加者は健康意識の高い人が多く、学生達の方が勉強させていただくこともあり、とてもよい経験ができました。一般の方との交流が初体験の学生もいましたが、満足感と面白みを感じることができたようで今後につながっていくことを願っています。



高校生を対象に吹奏楽クリニック開催

入試広報室 赤羽 研太

12月6日に、地元高校生を対象に吹奏楽のミニコンサート&公開クリニックを開催しました。東京校成ウインドオーケストラで活躍するトランペット、ホルン、フルート、クラリネット、サクソフォーン、ユーフォニアムの

演奏家6名を講師に迎え、9校126名の高校生が参加しました。



楽器別講習会では、講師のアドバイスにより、3分前とは全く違う音色になる生徒もいました。アドバイスされたことを繰り返し、自分のものとしていくことが大変ですが、今後の成長のきっかけになったのではないかと感じています。



第5回「松本大学地域貢献大賞」が決定

地域に根ざし、地域で活躍できる人材の育成を旨とする本学では、学生のさまざまな地域活動を多くの方に知っていただくとともに、その活動を支援・推進する目的で「地域貢献大賞」を設けています。今年も大学祭「梓乃森祭」でプレゼンテーションが行われ、大賞をはじめ各賞が決まりました。ここでは入賞した活動について紹介します。

〈審査委員長〉松本大学学長 住吉廣行
 上條尚史様
 中島和彦様
 関 成任様
 横山公一様
 田中 潔様
 尻浜博幸
 沖崎直子
 中村純子

〈審査委員〉セイコーエプソン労働組合執行委員長
 セイコーエプソン労働組合執行委員
 松本市新村公民館館長
 松本大学同窓会長
 松本大学後援会長
 松本大学全学学生委員会委員長
 松本大学人間健康学部学生委員長主任
 松本大学松高短期大学部学生委員長主任

地域貢献大賞 大賞

「あれから50年」2でいいじゃないの～。ダメよ～ダメダメ!!

スポーツ健康学科 田邊ゼミ

ゼミ活動として、中期高齢者を対象とした大町市・松川村の「きらり健康塾」、生坂村の「生坂村運動教室」、木曾町の「男性のための筋力アップ教室」、また後期高齢者を対象とした下諏訪町のカーサ・デ・ソル湖浜の「リズム運動教室」、さらに小学生を対象とした富士見総合型スポーツクラブの「苦手克服運動教室」など、多くのフィールドでそれぞれの結んだ連携協定に基づいて、運動指導を



中心に講座を実施しています。学生たちに、学内で学んだ知識や技術を用いて実際に指導をさせると、「専門知識の不足」や「コミュニケーションの難しさ」に気づき自らの課題をもって戻ってきます。それらをゼミノートに細かく記し、次回へとつなげています。



今回、地域貢献大賞で発表させていただいたのは、これらの活動に加え、松本山雅FCで行っている内容についてです。松本山雅FCと本学はアカデミックスポンサーとして連携協定を結んでいます。3年前から、ゼミの活動として定期的に選手の測定を実施しています。測定前には、何週間もかけ学生がお互いに被験者役になり練習を行います。測定室の規模から入れる人数が限られるこ

ともあり、学生たちは我こそはと必死で技術を磨きます。その学生の必死さとひたむきに学ぶ姿勢が受け入れられてか、今年度は新たに「効果的な走り方の指導」の依頼を受けました。エルシオ・フィジカルコーチは「ワールドカップを見てもダッシュのスピードは前回大会に比べて今回の方が上がっている。山雅には持久力はあるので、これからはスプリント能力のレベルを上げていきたい」と話されていました。学生が説明と実演を交えながらトップアスリートである選手に指導をさせていただくというのは、とても貴重な経験です。また、質問をする選手に対して、的確なアドバイスを送る姿はなんと頼もしく感じます。今回はこれらの一連の活動をまとめ、スポーツ健康学科4年生の高橋香織さん、中村悠陽君が発表しました。地域貢献大賞への参加はこれで4年目になりますが、今回初めて大賞をいただきました。(スポーツ健康学科専任講師 田邊愛子)

エプソンユニオン賞

「聴覚障がい者・ろう者と聴者を結ぶ架け橋」

地域づくり考房『ゆめ』学生プロジェクト「Sing」

Singは、聴覚障がい者の理解と啓発を目的に平成21年に発足しました。手話学習会や長野県松本ろう学校と交流を深め、23年に現在の4年生11人が参加したことで、活動はさらに活発化しました。

聴覚障がい者のデイサービス「れんげ草」・NPO法人松本市聴覚障害者社会参加支援協会・りんどうの会のミニデイサービス等への参加や、松本ろう学校の文化祭の準備・運営補助等の活動を通して聴覚障害について学びました。その学びを健聴者に伝えるために地域のイベントに参加したり、松本大学“梓乃森祭”で映画上映や、聴覚障が

い者と交流する場の提供をしてきました。

今年度は、地域の手話学習会や映画「架け橋～聞こえなかった3.11」上映の実行委員としても参加したことで、聴覚障がい者と合同の防災訓練を行いました。

また、大学周辺のまち歩きで聴覚障がい者にとって不便な場所を調査したことが



きっかけで、諏訪湖アートリング協議会との協働事業として諏訪湖周辺の文化施設のバリアフリー調査や、若者が訪れてみたくなる街づくりの提案へとつながりました。

学生たちは、より多くの健聴者に聴覚障がい者のことを知ってもらい、聴覚障がい者が暮らしやすい社会づくりを目指して有意義な活動を展開しています。4年生メンバーの結束と強い想い、4年間の前向きな挑戦が会の活動を促進させています。(地域づくり考房『ゆめ』専任講師 福島明美)



ものぐさ太郎賞

「NCP(栄養ケアプロセス)を用いた、スポーツジムに通う対象者の健康づくり支援」

健康栄養学科 藤岡ゼミ

栄養ケアプロセス・モデル(NCP)とは、栄養専門職が安全かつ有効で質の高い栄養ケアを提供するために、栄養関連の問題を体系的に解決する手法です。国際標準化を目指した取り組みが世界で進められており、我が国でも標準用語マニュアルが翻訳され、導入に向けた研修会が開催されています。研究室では、同システムをコンピューターソフト化し、栄養サマリー(申送書)に採用することで、国内における普及に貢献したいと考えています。今回は、松本市内のスポーツジムに通う対象者に、栄養ケアプロセスを用いて、栄養学的問題を解決する取組を報告しました。

(健康栄養学科専任講師 藤岡由美子)



後援会長賞

「栄養教育キャラバン隊の取り組み」

健康栄養学科 廣田ゼミ

廣田ゼミ3年生の発表テーマは「廣田ゼミがゆく! 栄養教育キャラバン隊」。

私たちがめざすのは、ヘルスプロモーションによる地域貢献。今年は教育アプローチに重点を置き、先輩方が築いた基盤のもと馬耕体験での豚汁提供を通じた栄養教育、スーパーで実施した「食育サツとシステム」による栄養診断、子どもたちと寝食を共にした「いっさか通学合宿」での食育等、多世代県民を対象とした様々な活動に取り組みました。

微力ですが、これからも栄養教育キャラバン隊の活動を通して、長野県民の幸せの集合形である長寿県長野の維持に貢献します。

(健康栄養学科教授 廣田直子)



大学祭実行委員会賞

学生主体の「健康づくり教室」が高齢者の生きがいに!

スポーツ健康学科 根本ゼミ

根本ゼミでは、松本市、諏訪市、安曇野市など7市町村で(計328名の中高齢者を対象に)、学生が主体となって展開している運動指導を中心とした「健康づくり教室」について発表をしました。学生から指導を受けた方々から「もっと継続して欲しい」「お陰で運動習慣が身についた」「学生さんの一生懸命さに感動した」との声が私の所に多く届きます。学生達の日頃の活動を、今回「大学祭実行委員会賞」として評価して頂きましたが、ゼミ学生の「世のため人のために」の精神で活動している姿には、私自身本当に頭が下がる思いです。

(スポーツ健康学科教授 根本賢一)



同窓会長賞

「保育園活動及び生坂村活動支援」～地域に支えられたゼミ学生の取り組み～

スポーツ健康学科 中島ゼミ

中島ゼミでは、ふたご保育園における活動、生坂村における活動そして馬耕体験活動について発表しました。

ふたご保育園では園児の運動能力調査の他、園児に対する運動遊び支援を実施しています。生坂村では児童への運動遊び支援と田んぼの楽校をほぼ毎月の割合で実施しています。馬耕体験では、250名以上の方々に楽しんで頂きました。

いずれの活動も地域の方々にご多大なご協力を頂き、また活動を通して学生の成長を応援して頂いています。地域の方々には衷心より感謝申し上げます。

(スポーツ健康学科教授 中島弘毅)



おめでとう! 学長賞

学生課長 丸山 正樹

本学では、学術・芸術・社会・体育・文化活動等において他の模範となる成績を修める、または社会に貢献した学生、団体について顕彰する「学長賞」を設け、受賞者の栄誉を称えるだけでなく、自主的な活動の振興を促し、本学のさらなる活性化につなげています。

今年も教職員から推薦があった個人及び団体について厳選なる審査を行い、最終的に住吉廣行学長が次の通り決定

しました。なお授賞式は、大学祭「第48回梓乃森祭」オープニングセレモニーの中で行いました。



今年度学長賞受賞者・団体

スキー競技部 **松沢 美甫** (人間健康学部スポーツ健康学科4年)
全日本学生スノーボード大会、FIS公認大会優勝、2013年ユバシード日本代表

ラート競技部 **林 佑季** (人間健康学部スポーツ健康学科4年)
[第10回全日本大学学生ラート競技選手権大会]団体準優勝、同大会個人戦準優勝

地域づくり考房「ゆめ」 **原 佑子** (総合経営学部観光ホスピタリティ学科4年)
[松本大学地域づくりコーディネーター]準認定資格を取得。本学学生の社会貢献活動に活躍

松本大学キャンパスナビゲーター
松本大学と連携し、入試広報の支援組織として、オープンキャンパス、保護者説明会等、学生の自治組織として活躍

松本大学と松商短期大学部 今年度も各2部門で選定

文部科学省では、教育の質的転換、地域発展、産業界・他大学等との連携、グローバル化などの改革に取り組む私立大学等を支援するため、「私立大学等改革総合支援事業」を実施しています。この事業において、取り組みに必要な設備費を「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」により補助しており、今年度これに松本大学と松商短期大学部が昨年度に引き続き、それぞれ2部門で選定されました。



平成25年度採択
「プロジェクト—体型インタラクティブ
スクリーンボード」を活用する学生たち

大学 タイプ 1

学生の主体的学修を促すための ICTを活用した全学的教育 マネジメント体制の構築

学生が自ら学修のPDCA(計画→実行→確認→行動)を実行するための「学びの羅針盤」を整備し、さらに授業内外で意欲的かつ能動的に学修に取り組める総合的な教育環境をICTの活用により構築します。具体的には次の3点を実施します。

- 1 携帯端末や貸与するタブレット端末を利用し、学生と教員、または学生同士がコミュニケーションを取り学び合う双方向型能動的授業で理解度向上を目指します。また、講義ごとに予習・復習課題を明示し授業外学修を促します。
- 2 シラバスにカリキュラムマップや履修モデル図などを加え、学生が体系化されたカリキュラムをより理解できるようにします。
- 3 新たに構築された学修支援システムと改善されたシラバスとを連動させ、カリキュラム情報や個別の学修成果を携帯端末等で随時確認できるシステムを構築し学生の能動的学修を促進します。

大学 タイプ 2

「出張科学実験教室」と 「食の安心・安全の確保」による 教育支援・子育て支援

本学は常に教育、研究を通じた地域社会への貢献活動に取り組んでいます。さらに教育的資産を活用し、地域の学校に対する教育支援、子育て支援を推進していきます。具体的には、次の2点を実施します。

- 1 本学ではこれまで、独立行政法人日本学術振興会の「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」等で松本市の学校の生徒を招き、地域貢献に取り組んできました。その際の要望を受け、子供たちの理科離れを防ぐために松本市の学校へ本学の教員が出張する「出張科学実験教室」を新たに実施し、学校への教育支援をより積極的に展開します。実験教室では継続的に遺伝子をテーマとした内容を扱い、その都度学校に持ち込める遺伝子解析のための実験機器・器具を整備します。
- 2 福島第一原発事故による食品の放射能汚染の問題は未だ多くの課題を残しています。本学では松本市公立保育園の給食用食材(主に長野県産)における放射性物質の存在量と暴露量を検査し、その結果を定期的に松本市に提供するために、学内に放射線測定装置を配備します。

短大 タイプ 1

図書館のラーニングcommons機能の 充実と授業外学修時間の増加による 学びの好循環の創生

学生が自ら学ぶ姿勢を確立し、本学における学修体験を通じて主体的に考える力を身につけさせるために、次の2点を実施します。

- 1 図書館のラーニングcommonsとしての機能を拡充・強化します。学生の図書館利用時間を教職員が把握し、各教員別にゼミや講義に関連するコーナーを設けて学生の利便性を向上させたり、予め教員がレポートの内容を図書館職員に知らせ、教員と職員との役割分担を意識しながらライティング指導等に当たる体制を整えます。
- 2 学生の主体的な学修を支える機能を有する大学図書館の利用時間に着目し、学部・学科別、学年別の図書館利用時間に関するデータを収集するために、図書館入館管理システムを整備します。本システムで得られるデータと、学生アンケート調査の結果とを併用し、学生の授業外学修時間の増加・確保及びその点検・評価に向けて全学的教学IRの一環として取り組みます。

短大 タイプ 2

地域発展のための ICT(情報通信技術)普及の取り組み

本学では地域貢献活動にタブレット型携帯パソコンを導入し、教育に大きな効果を上げているICTを活用した教育手法を広く地域社会に還元し、これからの地域発展のためICTの普及を目指します。具体的には次の3点を実施します。

- 1 学生と地域をつなぐ窓口「地域づくり考房『ゆめ』」でICTを活用し、毎年地域から持ち込まれる200件を超える様々な要望に対して、学生が本学で学んだ知識・技能を実践的に活かします。
- 2 60歳以上の高齢者を対象としたシニア大学のカリキュラムの中で毎年約180名の受講生を受け入れ、「ICT(情報通信技術)社会」をテーマとした講義と実習を本学教員が担当します。
- 3 本学では県内の複数の公立、私立高等学校と連携協定を結び、毎年約150名の高校生に高大連携事業を継続して実施する教育面での地域貢献に取り組んでいます。その中で、本学を訪れる高校生のためにタブレット型携帯パソコンを準備し、それを活用した商学および経営情報学の専門科目の講義を実施します。

好調な就職内定状況

キャリアセンター 課長 清水 康司



11月15日付の信濃毎日新聞の紙面に「大学生内定率4年連続上昇」の記事が掲載されていました。来春卒業予定の大学生の就職内定率は10月1日現在68.4%、4年連続で上昇したことが、厚生労働・文部科学両省の調査で分かり、2008年のリーマン・ショック前の水準にほぼ回復したものの、就職希望者の約44万4千人に対し、依然未内定の学生も推計で約14万人いるという内容でした。また、厚生労働省の担当者によると、今年度については「企業業績が回復して人手不足感が強まり、企業の採用意欲が高い」と分析していました。

本学では、このような就職環境を受け、今年度の求人件数が、大学部・短期大学部ともに昨年度より約1割増加し、内定状況についても全学部において、昨年度より高い内定率で推移しています。なかでも、管理栄養士を輩出する人間健康学部健康栄養学科は、現時点で約90%と非常に高い内定状況を得ており、学生の頑張りとともに、本学学生の社会におけるニーズを痛感しています。また、企業の採用は短大生から4年制大学生へシフトしている傾向があるにもかかわらず、短大生の就職が大変好調であり、行政、金融機関、大手企業など近年採用

がなかった企業からも多くの内定をいただいています。

本学においては、全学をあげて入口から出口(就職・進学)までをサポートしていますが、それに学生が応えた結果であるとともに、学生一人ひとりの頑張りであることには変わりありません。

これから卒業までの期間、全ての進路未決定者が納得する内定に結びつくよう、更なる支援に取り組みます。

▼総合経営学部内定先(一部抜粋)

内定先企業(順不同)
長野県警察
(株)長野銀行
(株)住友生命保険(相)
東日本旅客鉄道(株)
信州名鉄運輸(株)
敦賀海陸運輸(株)
(株)サイイ引越センター
日本郵便(株)
セキスイハイム信越(株)
積和不動産中部(株)
(株)イースタン
(株)ハーモニック・ドライブ・システム
フレックスジャパン(株)
ホシザキ北信越(株)
(株)ミマキエンジニアリング
サンリン(株)
昭和電機産業(株)
(株)長印
(株)ツルヤ
(株)本久ホールディングス
リコージャパン(株)
あづみ農業協同組合
関東三菱自動車販売(株)
(株)スズキ自販長野
あづみ農業協同組合
大北農業協同組合
塩尻市農業協同組合
松本ハイランド農業協同組合
グリーン長野農業協同組合
セコム上信越(株)
(株)トヨタエンタプライズ宿泊事業部 テラスリゾート&スパ
(株)明神館
医療法人仁雄会 穂高病院

▼人間健康学部内定先(一部抜粋)

内定先企業(順不同)
長野県警察
大阪府警
松本信用金庫
日本郵政(株)
東日本旅客鉄道(株)
長野赤十字病院
富士見高原病院
福井県済生会病院
社会福祉法人 平成会
オリオン機械(株)
ルビコン(株)
(株)関東日立
(株)グスリのアオキ
(株)ツルハホールディングス
(株)ツルヤ
(株)モリキ
サンリン(株)
タカヤマケミカル(株)
ユアサ商事(株)
リコージャパン(株)
あづみ農業協同組合
塩尻市農業協同組合
ながの農業協同組合
みなみ信州農業協同組合
とびあ浜松農業協同組合(静岡)
(株)グランディック
シダックス(株)
(株)ミールケア
(株)メフォス
日清医療食品(株)
日本ゼネラルフード(株)
(進学)上越教育大学大学院

▼短期大学部内定先(一部抜粋)

内定先企業(順不同)	
松本市役所	大和冷機工業(株)
辰野町役場	松本ガス(株)
アルプス中央信用金庫	堤川産業(株)
長野県信用組合	ブリヂストンタイヤ長野販売(株)
(株)みずほ銀行 長野支店	トヨタカローラ南信(株)
(株)みずほ銀行 松本支店	長野日産自動車(株)
山梨県民信用組合	(株)日産プリンス長野販売
(株)長野銀行	ヨコタインターナショナル(株)
(株)八十二銀行	(株)スズキ自販長野
(株)商工組合中央金庫 諏訪支店	(株)松本マツダオート
日本郵便(株)	関東三菱自動車販売(株)
信州名鉄運輸(株)	サンリン(株)
南信貨物自動車(株)	昭和電機産業(株)
(株)岩野商会	(株)国興
(株)住建	(株)マルニシ
積水ハウス(株)	長野県連合青果(株)
セキスイハイム信越(株)	(株)井上
(株)パナホーム東海	(株)タカチホ
(株)アストロ電機	あづみ農業協同組合
クリナップ(株)	塩尻市農業協同組合
伊那食品工業(株)	大北農業協同組合
春日電機(株)	ながの農業協同組合
山洋電気テクノサービス(株)	松本ハイランド農業協同組合
信州吉野電機(株)	信州諏訪農業協同組合
太陽工業(株)	税理士法人上野会計事務所
日東光学(株)	成迫会計事務所
マルヤス機械(株)	小野税務会計事務所
山二発条(株)	税理士法人吉澤会計事務所
ルビコン(株)	税理士法人瀬戸会計事務所
(株)イースタン	医療法人和心会 松南病院
(株)ダイシン	社会福祉法人 平成会
(株)ダイヤ精機製作所	(進学)富山大学

資格取得支援が充実

本学では、就職活動の大きな力となる国家資格をはじめとする資格取得を目指すプログラムを用意しています。日商簿記や情報処理など学部と関連の高い資格では、正課科目の講義を受講するだけでも十分、資格取得を目指すことが可能です。さらに、正課外においても資格に応じて対策講座を設けているので、難関とされる資格

試験にも、安心して挑戦できる環境を整えています。

これらの資格取得支援プログラムを利用した多くの学生が成果をあげており、2014年度前期では、宅地建物取扱主任者に2名、



国内旅行業務管理者に8名(大学7名・短大1名)、FP技能士に13名(大学8名・短大5名)が合格しました。

この他、全50回の公務員試験対策講座では、大学コース・短大コースを設け、さらに希望職種別に対策方法などを個別指導するなど、本学ならではのきめ細かい支援を実施しています。また、来春からはTOEIC600点以上を目指す対策講座を設けるなど、短期留学を支援するプログラムも拡充する計画です。このように、学生のニーズに合わせて、充実のプログラムで学生一人ひとりが描く未来を強力にサポートしています。

カゴメ(株)に見る工場の生産性と環境対策

総合経営学科

教授 葛西 和廣

総合経営学科の成善政教授と私によるカゴメ株式会社富士見工場でのアウトキャンパス・スタディが実施され、40人ほどの学生が参加しました。今回訪問したのは名古屋市に本社があり、全国に9つある製造工場の一つです。同工場は長野県富士見町に所在し、1968年創業、敷地面積は東京ドームの約2.5倍もの広さがあります。主な生産内容としては、紙パック飲料・ペットボトル飲料・ソース醸熟液の製造・原料野菜の加工などです。

カゴメ富士見工場は「よい原料」×「よい技術」×「地球へのやさしさ」をモットーに日々経営活動を行っています。少し詳しく紹



介すると、カゴメの商品づくりは原料の品種づくりから始めています。すなわち、世界中から野菜



のタネを集めてそれぞれの商品に適合した品種を開発しているのです。そして、その品種を契約農家と一緒に栽培し、栄養豊富な旬の野菜を育てています。保存料や着色料・化学調味料は使わず、原料が持っているおいしさそのままの商品づくりをしています。また、特許技術である「逆浸透圧技術」を用いて、1年中取れたての旬のおいしさを活かす技術で商品を生産しています。特に、地球への優しさとして、野菜の搾りかすは畑

の肥料や家畜の飼料に、ペットボトルは衛生服に、紙パックはティッシュやトイレトーパーなどに再利用され、100%リサイクルを目指しています。このような活動が評価され、カゴメ富士見工場は平成26年度「リデュース・リユース・リサイクル推進功労者等表彰」農林水産大臣賞を受賞しました。

今回は「食品製造企業における生産性と環境対策」というテーマで訪問し、商品の生産プロセスを見学しながら専門ガイドによる説明を聞きました。参加した学生たちは、普段飲んでいるジュースが自動製造システムでロボットと機械によるパッキング工程を経ながら商品化されるプロセスを直接目にすることができ、「大変面白かった」「とても勉強になった」「いつも飲んでいる野菜ジュースの製造過程が分かってよかった」などの感想を述べており、大変有意義なアウトキャンパス・スタディとなりました。

図書館見学～よりふかい図書館理解のために

短期大学部

教授 篠原 由美子

司書科目の学習では、できるだけ現実の図書館と結びつけて理解することを大事に考えています。実際の図書館を見学するアウトキャンパス・スタディは、このような学習を進めていくうえで大変よい機会です。今年も図書館を学び始めて間もない1年次の学生が、県内と県外の図書館を見学しました。

県内の見学先は、例年お世話になっている松本市中央図書館です。11月15日、図書館入門科目「図書館概論」を履修する10人が松本城近くにある中央館を訪問しました。図書館では3階から地下1階の書庫まで丁寧に案内していただき、図書館の



概要をうかがいました。大半の学生は、「図書館は貸し出しするところ」というイメージしか持たずに学習を始めています。見学を通して、図書館のバックヤードが広いこと、様々な業務があること、ネットワークが充実していることなど身をもって学ぶことができました。

県外の見学先は、愛知県田原市図書館です。11月20日のアウトキャンパスデイに、こちらは1年生だけでなく、社会人を含めた2年次の履修生と共に参加しました。この図書館は、優れた施設・設備で知られています。設計は、本学で「図書館施設論」をご講義いただいている戸野義彦先生です。また、利用率や運営面でもトップクラスです。館界でも知られている館長の豊田高広氏が分かりやすい資料を用意してくださって、図書館方針などを中心にお話いただきました。学生は、施設・設備面と運営面がしっかり結び



ついた魅力的な図書館になっていることが実感できたようです。「一日中居られる図書館だ」「写真でみると立派なので少し近寄りたいたいイメージを持っていたけど、とても暖かみを感じられる図書館だった」など、多くの感想が聞かれました。

学生たちは熱心にメモをとりながら説明を聞いていました。見学後に提出するレポートは冊子にまとめ、全員でレポートを共有することにしています。

長野県の観光業の活性化をめざして

学科横断による「新そばと食の感謝祭日帰りバスツアー」実施

健康栄養学科 専任講師 矢内 和博

本学は安曇野市で開催される「新そばと食の感謝祭」に6次産業推進事業との関係で参入していますが、本年度は集客アップに向け、アルピコ交通株式会社に日帰りバスツアーの企画を提案し、実施することになりました。ツアーの内容は①学生が(矢内研究室で)プロデュースした昼食②ワサビ収穫体験③学生バスガイドによる安曇野観光の3つを目玉とする学生主体の手作りツアーです。この取り組みは、ツアー企画としてははじめて

長野県の「おいしい信州ふーど(風土)」に認定されました。

参加促進のための広報がうまくいか心配しましたが、信越放送で長野駅出発のプレツアーの内容を放送していただきました。さらにテレビ信州では生放送で1分間のツアー告知をしていただくことができ、その結果当日は約40名が集まり、ツアーを催行できました。

今回の企画を通じ、学生のパワーを改

めて感じるとともに、健康栄養学科と観光ホスピタリティ学科とのコラボレーションで、長野県の観光業を活性化させる大きな可能性を感じました。他大学にはない特色が出せる活動をこれからも展開していきたいと思



長野県「おいしい信州ふーど(風土)」認定「わさび豚まん」の開発

矢内研究室で開発した「ワサビ葉ペースト」を使用した「わさび豚まん」が11月15日、梓川SA上り線、諏訪湖SA上り線、姨捨SA上下線の4か所で発売となりました。有限会社あづみ野食品、アルピコ交通株式会社との3社で共同開発したものです。

「信州アルクマそば」と同様に、地域の問題解決型の商品開発に取り組んだことにより、ワサビの葉など従来廃棄される部位が今回「わさび豚まん」として命を吹き返したことに喜びを感じています。

出演者、観客、裏方の人たちの心がひとつになった

「第4回 フラ・イズ・アロハ ハワイアンフェスティバル」

観光ホスピタリティ学科 教授 山根 宏文

観光ホスピタリティ学科山根ゼミでは、10月4日に「第4回 フラ・イズ・アロハ ハワイアンフェスティバル」を企画しました。今回の参加者は650名で、これまで3年間にわたる4回の開催で、のべ2,850名の参加になりました。前回までは、塩尻レザンホール、軽井沢大賀ホールを使用していましたが、経費削減、廉価な入場料金を設定するため、今回は本学の体育館で開催しました。



企画の趣旨は①松本大学東日本大震災災害支援プロジェクトの活動資金支援②国際文化理

解・交流③文化イベントプロデュースの実践指導④地域住民・子供たちに対してハワイ文化体験・紹介と明確にして発信しました。

イベントで大切なことは「本物」であり、世界の最高レベルを提供することと指導しており、今回は、ハワイから昨年度グラミー賞にノミネートされたハワイアン人気No.1の歌手ウェルドンさんと、沖縄からも人気の島唄歌手リサさんを招き、4時間にわたってハワイ文化であるフラ(ダンス)、沖縄民謡のコンサートを楽しんでいただきました。

体育館開催ゆえ設備の整っているホールと違い、多くの課題がありましたが、40名以上の多くの方のご協力のおかげで、課



題を解決し、体育館が立派なコンサートホールと思えた一日でした。

学生たちにも海外からミュージシャンを招聘してイベントを開催する手法と、イベントは出演者、観客、裏方の人たちの心がひとつになったときに良いものが生まれるということを実践を通して学んでもらえたと思います。

イベントの収益金286,530円は松本大学東日本大震災災害支援活動資金支援として寄付いたしました。

ご協力いただきました皆様に心から感謝いたします。

みちのくの大学人サミットに参加して

大学事務局長 小倉 宗彦

「大学人サミット」とは全国の国公私立大学の職員や学生が集い、意見交換し、さらに大学自慢を行うという、いわばSD(職能開発)の全国版のような催しです。

サミットは8回目を迎え、今年は岩手県立大学で開催されました。開催校が企画から実施まで全てを担うため、力量が試されるとともに

そのカラーも色濃く出るという特色があります。参加して、スタッフ、学生の熱意と東北ならではの温かい「おもてなし」に感動しました。

今回の内容は学生で構成されるキャンパスアテンダントによるキャンパスツアーに始まり、参加者が打ち解けるためのオープントレーニング、学長の基調講演、ワークショップ、大学自慢などでした。参加者は開催校のスタッフも含め130人余りでしたが、交流はとても刺激的だったと思います。

本学からは大学自慢で山本由紀、上條直哉の両主事が堂々たる発表を行い、「仕事や生活に活かすヒントを得た」部門で第1位を獲得しました。

2015年度は本学が開催校です。職員の熱意をどういう形にするか、乞うご期待。



話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』

地域づくり考房『ゆめ』専任講師
福島 明美

地域と大学の
連携事業

「産学官民協働事業」の取り組み

地域づくり考房『ゆめ』の産学官民協働事業は、地域の課題解決にむけて学生と行政・企業・自治会・市民活動団体等、地域の様々な組織・機関の方々が協働して取り組む地域活動を実施しています。

最初に関係者が集い、協働する意義や各々の役割を明確にし、両者合意のもとに企画書を作成して事業にあたります。そのことで関係が明確化し、学生にとっても地域にとっても有意義な活動が展開されています。

諏訪湖アートリング協議会× 考房『ゆめ』学生プロジェクト「Sign」× 長野県長寿社会開発センター 「諏訪の観光と美術館・博物館」 をテーマに協働事業を展開

10月25日に、諏訪湖周3市町の行政・観光関係担当者、美術館・博物館関係者、アートリングマイスター、考房『ゆめ』学生プロジェクト「Sign」の学生等、総勢80人が集い、「アートリングナビゲーターミーティング」が開催され、「一緒に考えて！—諏訪の観光と美術館・博物館」と題したワークショップを行いました。異年齢・異分野のメンバーが集うことで、あらゆる視点から様々な意見が出され、諏訪湖周辺にある17の美術館・博物館を活用した観光客、宿泊客の誘客と地域の活性化に向けた活動のあり方を考える機会となりました。今後、優先順位を付けながら関係者で実施し、2月には一般にも呼びかけ、長寿社会開発センター主催による「タウンミーティング」も計画されています。



またワークショップに先立ち、9月、10月に「Sign」がアートリング関係者で行った「諏訪の美術館・博物館のバリアフリー調査」と「諏訪湖まじゅう芸術祭への参加」による検証報告、さらに、若者が訪れたいくなるようなプランの提案をしました。学生は、「バリアフリーを充実させるだけでなく、施設の人の対応が重要」「若者誘致には、流行を取り入れた企画や展示、雰囲気統一、楽しめるコー

ナーづくりが必要」などの提案を行いました。

この事業は、長野県長寿社会開発センターのシニア活動推進コーディネーターからの紹介で、諏訪湖周辺にある17の美術館・博物館で組織する諏訪湖アートリング協議会より、「諏訪湖周辺にある文化施設のバリアフリー調査と若者が訪れてみたいくなるような施設のあり方や観光プランをいっしょに考えてほしい」と相談がありました。そこで、バリアフリー調査や聴覚障がい者が暮らしやすい環境づくりに取り組んでいる「Sign」と話し合い、3者協働事業として取り組むことになったものです。

松本市環境政策課×考房『ゆめ』 学生プロジェクト「◎いただきます!!」 「みんなで減らそう食品ロス」 事業を協働で展開

松本市では、“もったいない”の心でみんなで食品ロスの減量を目指そう!をスローガンに、様々な分野でごみ減量施策「残さず食べよう!30・10(さんまるいちまる)運動」に取り組んでいます。「食品ロス」とは、食べられるのに捨てられる食品のことで、家庭から出る食品ロスは、買いすぎ、賞味・消費期限切れ、調理時の過剰除去、食べ残し等の理由で発生します。この家庭でできる“食べ物もったいない運動”に学生プロジェクト「ヘルシーメニュー」が一緒に取り組むことになり、大学祭で事業の紹介とアンケート調査を行いました。



「ヘルシーメニュー」は、その後「◎いただきます!!」に名称変更し、若者から子育て中の家庭をターゲットにしたエコクッキングレシピを考案し、それをまとめ冊子にしてお届けしようと活動を始めました。丸ごと調理、残り物リメイク調理の考案と試作を行い、あわせて地域の方々からのアイデアを募集します。良いアイデアがありましたら是非ご紹介ください。詳細は、松本大学地域づくり考房『ゆめ』のホームページをご覧ください。

松本市公共交通協議会(松本市) ×考房『ゆめ』学生プロジェクト 「キッズスポーツスクール」×信州大学 「みんなで乗ろう!バスと電車の 交通ひろば」事業を協働で開催



11月8日に、松本市のモビリティマネージメント事業として、公共交通の利用拡大に向け、松本市内をバスで巡るスタンプラリーを実施しました。これは協働事業として取り組む、今年で3年目となる活動で、考房『ゆめ』を介して本学学生が「のりものラリー」を企画・実施しています。今回も市内にクイズポイント8カ所とミッションポイント4カ所を設け、親子で公共交通機関を利用して各ポイントを巡ってもらいました。ミッションポイントでは、手形押しやストラックアウト、かえる電車の前で制服を着て写真撮影や風船飛ばしなど、親子で楽しめる企画を用意しました。

2年間リーダーとして担当した廣岡帆晴(スポーツ健康学科3年)さんは、「電車やバスを上手く利用すれば、車を使わずに松本市内で遊べるということに気付いてもらいたいと思い企画しました。これをきっかけに、電車やバスの乗り方や利便性を実感し、公共交通機関の利用者が増えることを期待しています。」と述べています。

この程、3年間の活動協力に対して松本市から考房『ゆめ』に感謝状をいただきました。

地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション

地域健康支援ステーションでは、地域の健康づくりを栄養と運動の両面からお手伝いしています。最近の活動を紹介します。

管理栄養士スタッフ 飯澤 裕美
健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

「世界健康首都会議」で販売される健康弁当のメニュー提案



松本市で開催された「第4回世界健康首都会議」において、会議参加者に販売するお弁当のメニュー提案を行いました。同会議実行委員会から依頼を受けて行ったもので、今年で2回目となります。今回は、健康栄養学科2年生と3年生の有志16名が参加しました。

コンセプトを考え、メニューとして提案し、実際に販売する、という一連の取り組みに学生たちは試行錯誤を繰り返しました。授業としてメニュー作成や給食の実習を行っているので、学んだことを応用して実践するという深い学びの場となりました。

①コンセプト考案

松本市の管理栄養士や、今回提案するお



弁当の製造を行っていただく株式会社王滝の総料理長と管理栄養士から講義を受け、実際に王滝で販売されている健康弁当を試食しました。それらを踏まえ決めたコンセプトは「三がく都松本弁当～学生提案、山岳(やま)と音楽(おと)～」です。学びの成果を提案する「がく」、山岳の「がく」、音楽の「がく」、この3つの「がく」を合わせて「三がく都」です。

②メニューの試作と提案

コンセプトに沿って試作した料理を持ち寄り、検討を重ねました。れんこん、長いもなどの歯ごたえや音を楽しんでという願いを込め、三角の「和風きのごミートローフ」で山を、添えたミニトマトで太陽を、カリフラワーで雲を表現しました。食材は松本平の産物をできるだけ活用し、王滝に提案しました。

③リーフレット、ポスター作成と販売

学生の考えたコンセプトを具体的に伝えるためのリーフレットを作成しました。また販売日には、会議の席上で学生による健康弁当のプレゼンテーションもさせていただきました。250食のお弁当を売ることができ、お弁当を食べていただいた皆様からは多くの激励をいただきました。ご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

精神障害者施設通所者交流会でレクリエーションを実施しました



朝日村と山形村の施設通所者が集い、交流と親睦を図る目的で交流会を開催するにあたり、レクリエーションを担当してほしいとの依頼を受けて、10月初旬に伺いました。日ごろ身体を動かさない方々に適したプログラムをお願いしたとの希望がありましたので、まず2施設の通所者が、お互いを理解し親しくなるためのメニューを実施しました。そのあと2チームに分かれ、ドッジビー(布製フリスビー)を使った種目とサッカーを楽しみました。

係の方からは、「コミュニケーションの苦手な参加者同士が、レクリエーションを行うことで自己紹介がスムーズにできたこと、ゲームに夢中になって走ったりボールを取り合ったり普段の生活では見ることのできないエネルギー発揮の場面があったことなど、日ごろ関わるスタッフにも思い

がけない発見があった。また終了後の交流会が和気あいあいと盛り上がり大変よかった。」との感想をいただきました。

健康づくりを推進しているボランティアの勉強会で講話と運動実践を行いました



塩尻市福祉協議会から、市内の「元気づくり広場」などの運営ボランティアや一般市民のための講座(10月下旬開催)で、講話と運動の実践をしてほしいとの依頼がありました。



講話で、大往生の日まで自立した生活を送るには、メタボ、ロコモ、サルコペニアを遠ざけること、体力アップのためには効果的な運動が必要であることを重点に伝えました。運動実践では、各地区の民生委員も参加され、今後「広場」でも使えるようなペア筋トレや、歌いながら行う体力アップのための「ややきつい」有酸素性運動を楽しく実施しました。参加者からは、筋肉のことが分かってよかった、今後家庭でもやっていきたい等の感想をいただきました。

皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ(管理栄養士・健康運動指導士)がお手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください

感動の日本語スピーチコンテスト

10月31日、ホテルブエナビスタにおいて、松本東ロータリークラブ主催の「第25回留学生日本語スピーチコンテスト」が開催されました。本学からも大韓民国出身で総合経営学部1年生のイー・ジヒョン君と、中国出身で同学部2年生のアルズグリ・トルスンさんが出場しました。結果は、イー君が第1位、アルズグリさんが第3位



という素晴らしい成績でした。

イー君は、「私が最も大切にしていること」というテーマで、辛い兵役中に許された3分間の電話での母親との心の絆を語ってくれました。また、アルズグリさんは、「今までの人生で感動したこと〜どこへ行っても鍋の耳は4つ〜」というテーマで、母親の言葉「どこへ行っても鍋の耳は4つ(今の環境で頑張ることが大切な意)」を胸に頑張ってきたことを話しました。

2人のスピーチは審査員をはじめ多くの方々大きな感動を与え、その後の交流会でも大きな話題になりました。(国際交流センター運営委員長 糸井 重夫)

タイの学生との国際交流

10月21日にタイの高校生や専門学校生32名が本学を訪れました。これは、長野県観光協会からの依頼を受けて行った学生交流会で、日本の伝統的な文化遺産のプレゼンと、茶道の体験を行いました。



タイ語でのお出迎えとタイ語のメニューを用意したランチ体験の後、タイの民族舞踊とフルート演奏のパフォーマンスをお互いに披露しました。それから益山ゼミが重要伝統的建造物群保存地区の奈良井宿の景観と観光についてのプレゼン

を行いました。最後に、茶道部の有志の皆さんによる呈茶によるおもてなしとお茶を点てる体験をしていただきました。タイの学生さんたちには、終始和やかな雰囲気と笑顔のおもてなしに、大変満足していただけたようでした。

(観光ホスピタリティ学科 教授 益山 代利子)

総合経営学部1年生が心肺蘇生講習受講

9月30日、総合経営学部の1年生が集まって心肺蘇生講習を受講しました。今年は2学科合同、総勢180名の講習です。スクリーンは壁に張ったシート。手づくり感満載の講習になりました。



目前で人が倒れたときを想定したDVDを見ながら、実際に声を出して、体を動かします。「どうしました?」「大丈夫ですか?」反応・呼吸がなければ胸骨圧迫開始です。

胸骨圧迫は想像以上に力が必要です。90分の講習が終わったときには、汗びっしょりでくたくたになってしまった学生もいました。

命を救うということは決して簡単なことではありません。1回の講習ですべてを習得できるわけではありませんが、学生の心の中にこの講習が少しでも残り、もしものときに「自分がやります!」と言える人になってほしいと願っています。

(健康安全センター 保健師 脇本 澄子)

松商短期大学部 平成26年度前期学業成績優秀者を表彰

9月25日、松本大学松商短期大学部「平成26年度前期学業成績優秀者表彰式」が挙行されました。

この賞は、在学中の学業奨励を目的として、特に優秀な成績を修めた学生に授与し、更なる学業成績の向上及び修学意欲の醸成を図るもので、今回は、平成26年度前期試験の成績上位者を各学年10名(トップ10)ずつ表彰しました。

多くの科目において好成績を修めることは大変なことで、授業中での学修、授業外での

学修など、日頃、一生懸命勉学に励んでいる成果が表彰という形で現れたと言えます。

今回受賞された皆さんは、この賞を誇りとして、さらに勉学に頑張っており、学生生活を充実させて頂きたいと思えます。

(教務課長 丸山 勝弘)



教職員の意識改革やスキルアップ等をめざして「FDSD研修会」開催

「教学IRの意義と役割:教育の保証にむけて」開催

9月18日、同志社大学から教育支援機構副機構長の山田礼子氏を講師にお迎えし、FD・SD研修会「教学IRの意義と役割:教育の質保証にむけて」を開催しました。

IRという言葉自体はよく聞きますが、ここでのIRとは、Institutional Researchのことで、大学内の情報を数値化・可視化し、評価指標として管理し、その結果を教育・研究、学生支援、大学経営等に活用する活動という意味であったというのは初耳でした。しかし、山田氏の説明が進むにつれてアメリカにおけるIRの発展や具体的な活動が見えて来ました。日本においてはIRという言葉の意味すら浸透していない現状ではありますが、これ

からはIR部門を設置し、専門職を育成していくこと、これがいかに重要であるかということを実感しました。

(FD・SD運営部会長 長島 正浩)



互いを信頼し「国境線」を越える

職場におけるコミュニケーション能力の向上を目指して、SD研修会が開かれました。

本学には年齢や経験、勤務形態が異なる多くのスタッフが働いており、大学の学びや研究の成果を望む点は共通していても「ものの見方や考え方」はそれぞれ異なります。各々が相手の考え方を理解することは、学生や教員の支援にもつながることから、この研修会を開催しました。

今回の早稲田大学紛争交渉

研究所研究員 鈴木有香先生を迎えての研修には、8部署から12名が参加しました。2人ペアでの「国境線を越える」というワークではお互いを信頼し、勝ち負けや立場にこだわらず相手と近づく方法を実践しました。

ケーススタディ、ワークをする中で、さまざまな葛藤の背景にある感情を「他者への気づき」に変えること、また自分が成長するチャンスと受け止める大切さを学びました。

(管理課長 臼井 健司)

今年も大学祭!今年の大学祭!

教職員で構成されている学生委員会と、学友会(学生組織)に設置させている学祭局との今年度最初のミーティングが5月23日に開催されました。そして終わりを告げる反省会は11月13日、この6ヶ月間は10月の学祭中心にまわるのです。最初のミーティングでは主な骨格の提示がありましたので、当然、それ以前から時間をかけて準備した様子がうかがえました。そして迎える学祭本番は4日間です。一般公開の2日間ではなく、あくまでも4日間であり、時間をかけて準備してきたものが有効に展開できるかが最大の関心事となるのです。

私はお恥ずかしながら、これ程までに学生が主体的になって学祭の準備をしているとは知りませんでした。学生課の話によると、「年々良くなっている」とのことでした。教職員が立場で意見を言うのに対して、学生は十分な時間をかけて練った結果で対抗してこようとしているとさえ感じました。



全学学生委員長 尻無浜 博幸

今年度、初めて学生委員会の担当となり感じた率直な感想です。

さて、学祭当日の運営は今年いかがだったでしょうか。バザーの復活があり、その場所は短大側に人が流れるように設定したそうです。また、模擬店の機器使用改善のため事前保証金の徴収も新たに導入しました。長野県内大学で取り組むキャラクターアンケートも積極的に働きかけました。ゴミ箱がいっぱいになるとみっともないので、気が付いたところでゴミ箱を早めに片付ける指示もありました。東国原英夫氏のトークショーもありイベントに多少の工夫もありました。しかし、校内立ち入りのセキュリティが甘いのではないかと、学生にふさわしい芸人選びはどこかで必要ではないかとの声もありました。

最後に学祭絡みで紹介したいことが2つあります。1つは、学祭後片付けの日曜日の夕方、ゴミが持ち込まれる場所に担当者2名の配置がありました。これまでどんどん持ち込まれるゴミの量が多く気になっていましたが、今年は学生担当者が付きっきりで整理をしていたことです。もう1つは、学友会学祭局は3学部から総勢50名です。彼らはどうしても懸命になって学祭に携わっています



ので、参加するのみの学生と鮮明に色分けされる傾向にあり、どこかその一生懸命さに本人がひたる姿が度々見られました。そこで今年は少し注意しながら取り組みましょうという空気がありました。一緒になってやる、その意思が今年のテーマであった、「隣あいています?きっかけはココから」というラフさに現れていたと思うのです。

バザーの収益金 義援金として被災者に



今年の梓乃森祭ではバザーを復活させました。収益金は「7.9南木曾町豪雨災害義援金」、「長野県神城断層地震災害義援金」として送りました。

部活動情報 Club・Circle

女子ソフトボール部

ソフトボールの『金の卵』を見つけたい!!

~ソフトボール部 長野県ジュニアチームの指導~
女子ソフトボール部 部長兼監督 岩間 英明

松本大学ソフトボール部は創部当初から長野県ソフトボール協会と連携して、小中学生を中心にソフトボールの指導をしてきました。しかし、年に1、2回の講習会で100名を超える子どもたちに指導する従来の方法では効果が薄いのではと判断し、2011年から県協会の普及委員会とタイアップして『金の卵プロジェクト』を開始しました。大学生がジュニアチームの練習会場へ出向くという全国的にも珍しい指導方式です。

子どもたちにソフトボールの楽しさを伝え、好きになってもらうこと目標に、年平均12~16回、20~25チームに指導していま

す。子どもたちは普段、大人の男性から指導を受けているため、美人でかわいい!女子大学生が高いレベルでプレーする姿は刺激的で、改めてソフトボールのカッコ良さにも憧れを抱いているようです。

同部が長野県ソフトボールの普及発展に貢献すると同時に、子どもたちに指導することで、技術の再確認をする有意義な活動となっています。さらに指導の「難しさ」と「喜び」を体感することで、将来の指導者像を描く機会にもなっています。

『金の卵』から10年先、20年先に、日の丸を背負うような選手や指導者が生まれることを夢見ています。



硬式野球部

H27年関甲新学生野球連盟秋季リーグ戦 山梨・長野地区勝敗表

	山梨学院	松本	信州	山梨	順位
山梨学院	○	○4-3 ○10-0	○9-1 ○7-0	○10-4 ○5-1	1
松本	●3-4 ●0-10	○	○7-0 ○8-1	○8-1 ○7-1	2
信州	●1-9 ●0-7	●0-7 ●1-8	○	○6-1 ○3-1	3
山梨	●4-10 ●1-5	●1-8 ●0-7	●1-6 ●1-3	○	4

本学は2位で、第6代表決定戦へ進出

■第6代表決定戦(9月27日 於:上武大グラウンド)
松本大学 1-2 新潟医療福祉大学(新潟・群馬地区2位) 延長10回タイブレークで敗れ、決勝リーグへの進出はできませんでした。

男子サッカー部

【今年度の公式戦の結果】

- 第42回北信越大学サッカーリーグ1部 5位(7勝7敗)
- 第38回総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント北信越大会 準優勝
- 第19回長野県サッカー選手権大会 準優勝

みんな坊主になれ

製品の取り扱い説明書(取説)をきちんと読む人は少ないと思います。先日、安全救急の授業の中で、日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会から講師の先生を招いてヘアードライヤーの安全性についてのワークショップを開きました。

前半の講義では、ヘアードライヤーを使ったあとコードを本体に巻き付けた結果おきた事例を引いて、実はコードは本体に巻き付けてはいけないと取説に書いてあること、巻き付けるのを続けているとコードが伸びて、コードと本体の付け根の部分で断線してしまうこと、それから、こういう事

故が起こらないよう企業側でも製品を改良しているという話をされました。

後半ではこういった事故をなくすにはどうしたらいいか、学生をグループに分けて、消費者、企業、行政の立場でアイデアを出し合い、発表する形式をとりました。最初はとまどっていた学生も、付箋に自分のアイデアを書いているうちにいろいろな考えがでてきました。ドライヤーは身近に使っている人が多いので、コードレスにしたらいいとか、キャッチコピーのアイデアが出たりした中で、行政の立場で考えたグループから、みんな丸坊主にしちゃえ!などという

スポーツ健康学科 教授 江原 孝史

過激な意見も飛び出してきて、学生の発想到に驚かされました。いろいろな立場があり、また同じ立場でもいろいろな意見があることを、学生が気づいた授業でもありました。

この授業後、北信越大会の引率で泊まったホテルのドライヤーを見たところ、本体は壁の収納箱に入れて、コードは箱の穴を通して下へ垂れ下がっており、コードを丸めないような工夫がされていて、なるほどと感心しました。あなたのお宅ではドライヤーを使ったあとはどうしていますか?



学友会企画「ウインターフェスティバル」の一環で設置されたイルミネーション(12月8日~25日)

【表紙】校舎屋上にソーラーパネル設置

6月に着工した太陽光発電設備(ソーラーパネル)工事が12月1日に完了しました。最大出力100kwを想定したシステムで、本学のエコ・キャンパスプランが大きく進展しました。現在、冬季の条件下での1ヶ月の発電量は約24,000kwで、3~5日間相当分の消費電力をまかなえる見込みです。

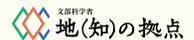


学内に設置したモニターには太陽光発電による電力供給の様子が常時表示され、エコ・キャンパスの取り組みを学生に伝えています。

編集後記

今年、長野県をさまざまな災害が襲った。2月の大雪に始まり、7月の南木曾町土石流災害、9月の御岳山噴火非常災害、11月の長野県北部地震(長野県神城断層地震)と、これまでにない自然災害だった。本学の在学生や入学予定者にも被災された家庭があり、心からお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興を願っている。日本はおかしくなっている、いや地球がおかしくなっている。気候ばかりか地球の内部までがおかしくなっている気がしてならない。とはいえ自身が平穏無事であることに感謝しながら、地球を壊さないよう努力し、一日一日を精一杯生きていこうとつくづく思う。(記・入試広報室長 中村文重)

Information



人間健康学部健康栄養学科主催「COC公開特別講演会」開催
女性のライフステージに応じた健康管理
～専門職間の連携の視点も含めて～

【日時】2015年2月14日(土) 10:00~(受付9:30~)

【開催場所】本学633教室

【講師】宮原富士子氏 NPO法人HAP(Healthy Aging Projects For Women) 理事長、
日本女性医学学会認定薬劑師

聴講ご希望の方は、ご住所、お名前、電話番号、参加人数を明記の上、FAX、e-mail、又はハガキでお申し込みください。

〒390-1295 長野県松本市新村2095-1
TEL 0263-48-7200 FAX 0263-48-7290 E-mail ecenter@matsuo.ac.jp

ご相談内容は何でもOK!

入試相談会

入試、学費、奨学金、大学・短大の学びについて、学生生活など何でもご相談ください。

個別に対応いたします。保護者の方もお気軽にご参加ください。

事前予約は必要ありませんが、事前にご連絡いただければご指定の時間に専門スタッフが対応させていただきます。

●入試相談会(全学部・学科)

【日時】2015年1月22日(木)、23日(金) 10:00~15:00

【開催場所】本学

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問い合わせください。

www.matsumoto-u.ac.jp ☎0120-507-200



〒390-1295 長野県松本市新村2095-1
TEL 0263-48-7200 FAX 0263-48-7290
<http://www.matsumoto-u.ac.jp/>